

研究種目：若手研究（スタートアップ）

研究期間：2007～2008

課題番号：19820022

研究課題名（和文） 日本古代官人データベースの構築ならびに木簡を用いた
情報管理の研究研究課題名（英文） Construction of the database of Japanese ancient governmental
official , and Research about Information management with Mokkan
(wooden tablets)

研究代表者

畑中 彩子 (AYAKO HATANAKA)

学習院大学・文学部・助教

研究者番号 80453497

研究成果の概要：

本研究では、7～12世紀の勤務評定・成績に関わる史料を調査し、長屋王家出先機関跡などの国内の木簡出土地、ならびに韓国慶州にて木簡の観察、現地調査を行い、日本古代国家の情報管理法の検討を行った。その一環として、『続日本紀』以下六国史の叙位記事のデータベース化を目的に、叙位記事の入力を完了させた。さらに宇多天皇以降の叙位記事を収集し合わせて入力した。これらのデータをもとに新しい叙位の形態「加叙」の成立過程を解明した。

交付額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	1,030,000	0	1,030,000
2008年度	1,020,000	306,000	1,326,000
年度			
年度			
年度			
総計	2,050,000	306,000	2,356,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：日本史

キーワード：古代史、木簡、史料学、データベース、出土文字資料、律令国家、官人、

1. 研究開始当初の背景

(1) 研究の学術的背景

日本古代の官人制度の本格的な研究は、律令国家制度を実証的に解明することを目的に、野村忠夫が着手したことに始まる（『律令官人制の研究』1967、『官人制論』1975）。野村は「大宝令」「養老令」の規定を詳細に分析し、8世紀の考選制度、即ち官

人の勤務評定と官位昇進制度を明らかにした。一方、石母田正『日本の古代国家』（1973）、早川庄八『日本古代官僚制の研究』（1986）以後、官人制を天皇権威との関係で捉えるようになり、吉川真司が天皇への〈仕奉〉と対価としての〈叙位・賜禄〉の相互応酬関係を指摘するなど、官僚構造の中で叙位を位置付ける試みがなされるようになった（吉川真司「律令官人制の再編」1989他）。

また、日本古代国家を東アジア史の中で捉え直す試みが進み、律令や儀式などの受容過程が、日中の研究者により論じられるようになった（池田温編『中国礼法と日本律令制』1992他）。しかし日中位階制度の主要な研究は、両国の制度の検討を行った大庭脩『唐告身と日本古代の位階制』（2003）があるのみで、両国の支配構造の中での位階制度の位置づけ、および木簡を用いた実態の比較検討には着手されていない。中国や朝鮮半島での竹簡や木簡の出土例も増加しており、合わせて日中朝の律令規定を検討すべきである。

(2) 研究の動機

研究代表者は上記のような研究動向を踏まえ、日本古代国家の統治システムの解明を目的に、「律令官人」に授与された「位階」、および位階を授ける行為である「叙位」について、実証的な解明を試みてきた。

学位論文『日本古代王権と官人支配の研究』では、(A) 8～9世紀における叙位制度の実態の分析、(B) 通常の勤務評定と臨時の恩賞など叙位の実施契機ごとの考察、(C) 日中叙位制度の比較検討、(D) 地方官衙（山口県長登（ながのぼり）銅山出土木簡〔山口県美祢市〕）における銅生産および勤務管理法の検討を行い、労働と国家運営という実務的視点からの研究を進めてきた。

以上のように、律令国家の根幹である位階秩序を解明するなど、位階授与の有するイデオロギー的側面に主眼を置いていたが、検討の過程で勤務評定を目的とした官人の管理は、木簡を用いた審査、紙の文書による位記の授与、さらに六国史への記録という、古代の情報の管理方法を示す重要なサンプル例であることに気づいた。また入力を進めている叙位記事をデータベースとして完成・公開させることによって、古代史研究法を前進させることが可能であると考えた。

2. 研究の目的

学位論文の成果を発展させ、官人の勤務評定や勤務管理、作業報告資料を用いて、8～11世紀における律令国家の「情報」の管理・運用、ならびに国家経営についての解明を目的とする。

(1) 官人勤務評定関係の資料収集・分析

「六国史」などの編纂史料、日記などの古記録、出土文字資料、古文書等から、官人勤務評定関係の資料を広く収集・分析し、各組

織における木簡や文書を用いた、官人や生産の管理・処理方法を解明する。

(2) 中国・朝鮮諸国との比較による日本古代国家の特質の解明

中国ならびに中国法を継受した朝鮮諸国の官人の考課・選叙に関する資料を収集し、日本の実態と比較検討し、中国・朝鮮半島からの經由過程や実態の解明を試みる。

3. 研究の方法

(1) 六国史の叙位記事をもとに木簡・文書・記録類を用いて、8～11世紀における官人の昇進状況の復元を試みる。

その手段として、『続日本紀』『日本後紀』『日本文徳天皇実録』『日本三代実録』の叙位記事を入力し、日本古代官人データベースを構築する。

(2) 勤務評定・成績に関わる資料（木簡・正倉院文書・六国史）を収集・分析し、中央官司・地方官衙・貴族邸宅等の経営構造とあわせて、古代国家の具体的な情報管理法を解明する。

(3) 東アジア史の中で日本古代史を位置づける。中国や朝鮮半島での竹簡や木簡の出土例も増加しており、今後は制度の検討と合わせて、百済や新羅や高句麗などの朝鮮諸国の官人支配秩序や支配構造の中での位階制度の位置づけ、および実態の比較検討を行う。

日本に直接的に影響を及ぼしたと考えられる、新羅の首都である慶州へのフィールドワークを行う。

4. 研究成果

(1) 日本古代官人叙位記事データベースの構築

① 六国史データベース

『続日本紀』『日本後紀』『続日本後紀』『日本文徳天皇実録』『日本三代実録』ならびに『類聚国史』の叙位記事の入力が完了した。

入力終了後、卒伝・任官記事などによって、データの補完を行うとともに、データの校正作業を進めている。

現在は、Access上でデータを把握すること、紙媒体で一覧表の形で参照することが可能となっている。しかし、AccessがインストールされていないPCでの閲覧はできないため、今後、データの精査ならびに校正を踏まえ、

検索可能なデータベースとしての体裁を整えるよう、作業を継続している。

氏名	年月日	西暦	和暦	本位	叙位	評等	性別	典拠	備考
1769 大隅4	4月戊子	80604013	嵯峨即位	従五位下	正五位下	1	m	藤原国史	
1775 大隅4	4月己丑	80604014	高倉親王立太子	正五位下	従四位下	1	m	藤原国史	
287 弘仁5	11月戊午	81511022	大嘗祭	従四位下	従四位上	2	m	続日本書紀	
419 弘仁3	12月己丑	81212005	平明	従四位上	正四位下	1	m	藤原国史	
1904 弘仁5	4月乙巳	81404009	空襲御行幸	正四位下	従三位	1	m	藤原国史	左大臣大内
1990 弘仁3	6月戊辰	81306018	藤原官任官	従三位	正三位	1	m	藤原国史	
2085 弘仁13	正月乙亥	82201007	正月即位	正三位	従二位	1	m	藤原国史	
2217 弘仁14	4月辛亥	82304027	即位即位	従二位	正二位	1	m	藤原国史	

(個別官人データ集計カード)

② 平安時代叙位記事データの入力

勤務評定法の変遷過程を解明するにあたり、六国史以降の叙位記事についても、入力を進めた。

○『大日本史料』

第1編(24冊+補遺4冊)～第2編(29冊)の叙位関連記事・データの入力完了。

○『公卿補任』

六国史の叙位記事の補完を行うため、寛平(889)年間以降の入力を進めた。個別官人の経歴についても合わせて入力を行った。

将来的には、両データを統一し、さらに古記録類により補完していく予定である。これまで、平安中期以降の叙位データを一括してまとめた史料集・図書などは公開されていないので、データを精査し、広く活用できるようにしたいと考えている。

(2) 情報管理・伝達法の研究

出土文字資料(木簡を中心)、古文書(正倉院文書等)の勤務・評定関連史料の収集・分析を行い、諸官司等における勤務実態・成績評価方法について、検討を行った。

また、史・資料の調査と分析のために、木簡が出土した遺跡についてフィールドワークを行った。

① 長屋王邸宅跡出土木簡の調査

長屋王邸宅には、平城京所在の家政機関のほか、大和国各地に園地を含む出先機関を複数所有した。これらの各所より進上されたとみられる、勤務評定(考選)、生産、輸送に関わる木簡が多数出土している。長屋王家に勤務する家令やトネリたちは、上記の各部局にて勤務し、その勤務成績は邸宅内の家政機関に集められ、管理・審査されていた。

木簡は、出土した環境・周辺地域との関

係・地形を含めた遺跡全般を考慮して、使用方法・目的を判断しなければならない。そこで、生産活動と勤務の関係に着目し、輸送の経路を確認すべく、平成19年12月ならびに平成20年3月にフィールドワークを行った。調査地は、長屋王邸宅家政機関所在の奈良県奈良市、関連機関の所在する、奈良県香芝市、広陵町、橿原市、明日香村である。

出先機関「木上司」を中心的な検討材料とした。同地より提出された上日(勤務日数)木簡ならびに、「竹」の進上を示す木簡がある。そこで「竹」の生産状況を把握するために、候補地の地形・植生などの自然環境の観察ならびに輸送ルートを検討を行った。

現在、候補地である香芝市・広陵町・飛鳥村飛鳥の地には、竹が群生した丘陵地帯が存在する。いずれの地からも、「竹」の輸送が可能であり、長屋王邸における邸宅整備の一環としての「竹」の移植を想定することが可能となった。現在この調査結果をもとに、論文を執筆中である。

② 韓国出土木簡の検討および現地調査

日本における木簡導入に、多大な影響を与えた韓国の出土木簡の検討が不可欠なことから、平成20年11月に新羅の旧都である韓国慶州市を訪問し、慶州の宮城跡である「月城跡」、宮苑池跡である「鴨雁池遺跡」、新羅仏教護国の寺である「皇龍寺跡」を中心に実地調査を行った。

また慶州国立博物館にて、上記遺跡より発掘された遺物および木簡を実見した。太子の居所といわれる鴨雁池より出土した木簡は、内廷の運営・管理に関する内容のものを多く含んでおり、①で取り上げた長屋王邸の家政機関で用いられた木簡と、形状・内容などに共通点が見出され、両者の比較の重要性を実感し、今後の研究に大いなる示唆を得た。

さらに大邸市所在の慶北大学校を訪問し、同大学師範大学歴史教育科の李文基教授(朝鮮古代史)をはじめとした研究者と意見交換を行った。特に、韓国の帳簿状木簡の存在や、韓国における発掘・出土状況などについて示唆を受けた。李教授らが、研究代表者の勤務校学習院大学を訪問したおりに、日韓の木簡について意見交換を行った。

また日本において、上記の月城より出土した月城塚字木簡、百濟城山山城出土木簡などについて、国内外の諸研究者とともに、形状の分析、釈読を行った。

今後は、百濟の旧都である扶余における調査を行い、日本における木簡の利用法の受容

について、日韓の木簡・遺跡の比較検討を行い、解明したいと考えている。

③ 地方官衙における遺構の調査ならびに出土木簡の検討

研究開始時には、山口県長登銅山遺跡へのフィールドワークを予定していたが、研究期間中の発掘調査・報告の状況を踏まえ、さらに韓国出土木簡と比較すべく、類似点が指摘される7世紀の木簡の調査・検討を中心に行った。

○滋賀県野洲市・安土町における調査

平成20年9月、滋賀県安土考古博物館で実施された、国立歴史民俗博物館の共同研究「古代における文字文化形成過程の基礎的研究」第2回研究会へ特別の許可を得て、参加し、西河原遺跡出土木簡の調査を行い、野洲市内における現地調査に参加した。また、同博物館で開催された「古代地方木簡の世紀」にて、木簡の観察を行い、地方官衙における木簡の用法について研究を進めた。

○静岡県浜松市・磐田市

浜松市伊場遺跡にて遺構の調査を行い、同市博物館にて伊場木簡を実見した。

さらに発掘調査が進められていた磐田市の遠江国分寺遺跡の調査・観察を行った。

以上を踏まえ、日本古代の地方における官衙および関連遺跡の構造と、同地における木簡を用いた運営法について研究を進めることができた。

(3) 勤務評定儀礼「加叙」の解明

本研究上における、勤務評定法の資料収集ならびに検討という課題に基づき、平安中期に成立した「加叙」儀の解明をおこなった。

「加叙」とは正月五日の叙位議にあたり、当日の昇進の選考に漏れた官人を、改めて審議し、追加で叙位を行う儀礼をいう。これまで、「加叙」に関する先行研究はなかった。

前記の平安時代データベースを作成した上、『御堂関白記』『小右記』などの日記や、12世紀末に成立した『妙音院相国白馬節会次第』『四節八座抄』などの儀式関連書を用い、儀礼の復元、成立過程を解明した。平安時代の叙位儀礼については、未解明な部分が多いが、本研究は、「加叙」儀を明らかにすることによって、10世紀以降の宮廷の構造変化を、撰関時代における精神的構造によるものではなく、実務の効率化によるものであることを、解明することができた。

成果については、「加叙の成立～撰関期における政務としての叙位の変遷～」（『学習院大学文学部研究年報』第55輯、2009）として発表し、さらに『年中行事大辞典』「加叙」の項目（吉川弘文館、2009）として公開した。

以上の研究は、研究代表者の研究基盤となる史資料の収集ができ、さらに韓国を含めた国内外の研究者との研究交流の礎となるものとなった。今後、以上の成果を踏まえ、研究課題を継続していく。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 1 件）

① 畑中彩子「加叙の成立～撰関期における政務としての叙位の変遷～」

『学習院大学文学部研究年報』、査読なし、2009、第55輯、P 1-41

〔その他〕

○辞書項目

① 畑中彩子「加叙」・「女叙位」

『年中行事大辞典』吉川弘文館、2009

○ニューズレター

① 畑中彩子「韓国慶北大学校 研究交流報告」（『東アジア海文明の歴史と環境ニューズレター 海雀』2008、第6号、P15-15）

6. 研究組織

(1) 研究代表者

畑中彩子 (HATANAKA AYAKO)

学習院大学・文学部・助教

研究者番号：80453497

(2) 研究分担者

なし

(3) 連携研究者

なし